

## 建築家の言説における形容詞の研究

### - 形容詞からみる建築家の言語表現の変化 -

坂牛研究室 08TA307E 大日方 由香

## 1. 序

### 1.1. 研究の背景

2007年、建築専門誌である「新建築」誌において、真壁智治、祖父江慎による“カワイイ”、“かわいい”という形容詞に関するエッセイ が数回に渡って掲載された<sup>1)</sup>。真壁の著書「カワイイパラダイムデザイン研究」<sup>2)</sup>で述べられているように、これまで“カワイイ”は建築の分野で議論されるようなテーマではなかった。妹島和世や同事務所出身の石上純也といった現代を代表する建築家も、創作の過程で“かわいい”という言葉を用いているという<sup>3)</sup>。また真壁は、意味を頭で理解するのではなく、身体的に理解する感性の言葉である“軽いコトバ”<sup>4)</sup>が増加しており、それは現在の情報化社会によって情報が氾濫する中、言葉が“追っていくもの、流すもの”になった事に一因があるという。それは、溢れる情報を取捨選択していく一つの手段として発達してきた結果であると考えられる。そうした変化が、建築界における言語活動にも現れている。

建築家藤本壮介は、自らの設計手法に“弱い建築”というキャッチコピーをつけた<sup>5)</sup>。藤本は感覚的に“弱い”という言葉を使用し、そこに設計手法や構成、関係性等を表現しようとしている。建築家西沢立衛は、そうした言語表現活動によって、これまでの機能的な分類だけでなく、雰囲気や状態による分類を作り出し、新たな空間性を得ようとしており<sup>6)</sup>、言葉による表現活動が設計に影響を及ぼしているといえる。

“カワイイ”、“かわいい”や“弱い”の他にも、これまで建築を語る時に“軽い/重い”、“透明な/不透明な”などさまざまな形容詞が使われてきた。そこで本研究では、建築家の言説における形容詞を、設計活動に関連する表現活動の一つであると位置づけ、経年変化を追うことで、建築家の表現活動の構造の一端を明らかにすることを目的とする。

### 1.2. 形容詞の性質

形容詞、形容動詞は主に名詞を修飾し、そのものの状態や性質を表す語類である。現代形容詞用法辞典<sup>7)</sup>によれば形容詞は大きく分けて「意味の核」と「意味の肉」という二層構造になっており、(表1)のように示されている。

「意味の肉」に  
よって、設計者が自身の建築について述べようとする時に客観的に性質や状態を述べるだけでなく、写真や実際の建築を見ることでは伝えることが不可能な、設計者が本来意図していたもののイメージやニュアンスを伝達することが可能であると考えられる。1.1. で述べた藤本壮介の“弱い建築”の“弱い”という形

容詞は、意図する設計手法に関する意味に加えて、「意味の肉」にイメージやニュアンスといった感覚に関するものが含まれていると考えられる。

文の主幹をなす要素であるといえる動詞・名詞は、主に客観的な事実を記述している場合が多いのに対し、形容詞は読者にイメージや感覚を与える広がりのある語であり、表現性の高い語であるといえる。

### 1.3. 本研究における形容詞の定義

一般的に形容詞をイ形容詞、形容動詞を形容詞の一部としてナ形容詞と呼ぶ場合が多い。西尾寅弥による「形容詞の意味・用法の記述的研究」<sup>8)</sup>においても形容詞と形容動詞を併せて「形容詞」としている。また、多くの名詞が“的な”と付することで形容動詞の語幹をつくることができる。

本研究では形容動詞および形容動詞の語幹をつくるものを含めた広義の意味で、以下形容詞と呼ぶこととする。

### 1.4. 既往研究

建築雑誌に掲載されている建築家の言説を対象とした研究として、坂本らによる、文章から意味を読み取り、その創作論の変遷を追うもの<sup>9)</sup>がある。また、特定の品詞を分析対象とした研究として、成瀬による受動態、自動詞、補助動詞に関する研究<sup>10)</sup>があるが、そこでは建築家によって記述された文章において、対象の品詞がどのような役割をもっているのかというレトリック分析を目的としている。

上記の研究と本研究との差異は、第一に、形容詞(形容動詞)という特定の品詞のみを対象としている点である。第二に、それら形容詞の文章中での役割及びその構造を解明することではなく、形容詞そのものを建築家の“表現”としてとらえ、その表現手法および意味の変遷を追うことにある。

### 1.5. 研究対象

#### 1.5.1. 形容詞の抽出対象

本研究では、形容詞の抽出対象として「新建築」誌の45巻1号(1965年1月)から84巻1月号(2009年1月)まで毎巻1月号の計40冊を扱う。「新建築」誌を対象とした理由として、1925年の創刊から終戦時の休刊一年を除いて、継続的に発行されていること、建築家の言説が多く掲載されていることが挙げられる。対象を70年以降としたことに関して、既往研究<sup>11)</sup>を参考とした。その中で、住宅特集や特定の建築家の特集等が組まれた号は除き、その場合は本条件に合致する次号以下を対象とした。

上記対象に掲載された作品で、既に竣工された作品に付された意匠設計者本人による解説文およびその表題<sup>12)</sup>を対象とし、記述者名が記載されていないもの、対談形式のもの、外国人設計者等による記述、編集部による解説文は除いた493作品、593の解説文およびその表題856から形容詞の抽出を行った。

掲載されている以上の条件に合致する対象作品数及び一作品あたりの解説文数使用の平均、一解説文あたりの表題数の平均の経

年推移は(図1)の通りである。

対象作品数、対象解説文数共に70年代から00年代まで増加傾向にある。一方、一作品あたりの解説文数は80年代には減少し、その後00年代にかけて増加していき、一解説文あたりの表題数は70年代から90年代にかけて減少した後00年代には増加する。このことから、本研究で対象とした「新建築」誌では、80年代では設計者による発言が少なく、その後00年代に向けて、発言が多くなっていていること、80年代、90年代には解説文への表題の使用が他の年代と比較すると少ないことがわかる。

図1) 研究対象の概要

図1) 研究対象の概要

#### 1.5.2. 形容詞の抽出

本研究では、1.5.1. で挙げた条件に該当する文章中において、形容詞の特徴的な機能である名詞を修飾する形容詞<sup>13)</sup>を抽出対象とする。その結果、表題中から64、解説文中から7760の形容詞が抽出された。

### 2. 分析・考察

抽出した形容詞に対し、①表題中で使用された形容詞、②解説文中で使用された形容詞、③表記方法(漢字/ひらがな/カタカナ/英語)、④KJ法的分類<sup>14)</sup>の4つの分析・考察を行う。

#### 2.1. 表題中で使用された形容詞

本研究で対象とした493作品のうち、表題に形容詞を使用した作品は48作品であり、表題に使用された形容詞は64であった。表題に形容詞を使用している作品は、70年代から00年代にかけて増加している。一方、対象作品数は70年代から90年代まで増加しているものの、00年代には減少している。また、対象作品数に対する形容詞使用作品数の割合をみると、80年代から00年代にかけて増加している(図2)ことから、近年、解説文の表題に形容詞を使用する作品が増えていることがわかる。また、形容詞が表題に使用されている回数(形容詞使用回数)と表題に形容詞が登場した1973年を0として、その後新規の形容詞が登場した場合の数(新規形容詞数)、一表題あたりの形容詞使用回数の平均を表したグラフが(図3)である。このグラフから、表題への形容詞使用の増加にともない、新たな形容詞が使用されていく傾向がみられる。また、一表題あたりの形容詞使用回数も増加しており、表題への形容詞の使用が80年代以降増加していることから、近年、表題によって客

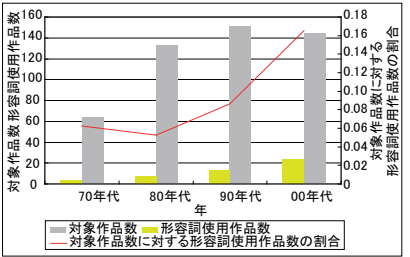


図2) 表題中で形容詞を使用した作品の概要

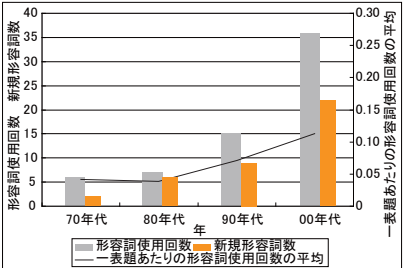


図3) 表題中で使用された形容詞の概要

観的表現だけでなく、イメージやニュアンスを伝える傾向があると考えられる。

#### 2.2. 解説文中で使用された形容詞

解説文から抽出された形容詞7760の各年代毎の使用回数、使用種類数、解説文数、一解説文あたりの形容詞使用回数の平均、一形容詞あたりの使用回数の平均を表したグラフが(図4)である。一解説文あたりの形容詞使用回数は70年代から00年代に向かって減少している。一形容詞あたりの使用回数は70・80年代と比較し90・00年代は多く、それぞれの使用回数は70・80年代が<新しい>、<大きな>、<さまざまな>、90・00年代が<さまざまな>、<新しい>、<大きな>の順に多くなっている。このことからこの3つの形容詞は、70年代以降、建築家が使用する形容詞の中で固定的であるといえる。また、70・80年代は<新しい>に、90・00年代は<さまざまな>に形容詞の使用が偏向していることがわかる。

図4) 解説文中で使用された形容詞の概要

図4) 解説文中で使用された形容詞の概要

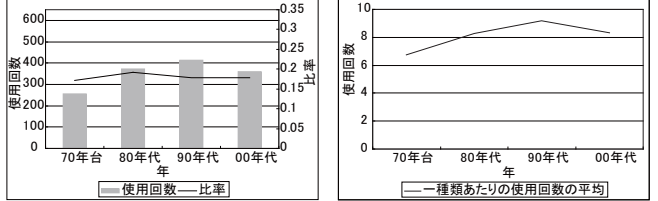
#### 2.2.1. KJ法的分類による分析・考察

ここでは被修飾語は考慮せず、形容詞のみの意味・内容から形容詞7760/種類数1415を対象とし、KJ法的分類を行った結果<sup>15)</sup>、①量、②質、③性能・性状、④比喩・関連、⑤位置づけ、⑥印象、⑦評価、⑧感情の8つの分類を得た。これらの各分類において、各年代10年毎の使用回数、比率(各年代毎の全分類の合計使用回数に対する各分類割合)、及び一種類あたりの使用回数の平均(各年代・各分類における使用回数/使用種類数)の経年変化を(図5)から(図20)に表し、分析・考察する。

#### ①. 量 (図5)、(図6)

事物の具体的性質を表すもののうち、<大きい>、<広い>、<長い>等、容積、体積、数量などの数値的な増減が人の知覚・認識に与える影響が大きいものを“量”カテゴリとし、この条件により、使用回数1401、65種類の形容詞が抽出された。

比率が80年代が最高値となっていることから、他の年代と比較し、形容詞の使用において量を表す形容詞が多いことがわかる。



「量」カテゴリ

図5) 使用回数および比率

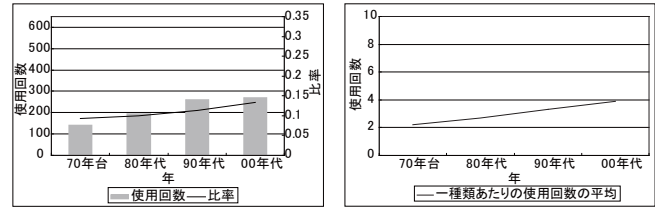
図6) 一種類あたりの使用回数の平均

#### ②. 質 (図7)、(図8)

量と同じく、具体的性質を表している形容詞のうち、<明るい>、<柔らかい>、<四角い>等、数値的な増減が知覚・認識に与える影響が小さいもの、不安定なものを“質”カテゴリとし、この条件により使用回数865、138種類の形容詞が抽出された。

質カテゴリの形容詞は、70年代から00年代まで使用回数、比率、一種類あたりの使用回数全ての項目において増加傾向にある。00年代は<透明な>、<白い>、<強い>、<明るい>、

＜柔らかな＞の順に多く使用されており、形容詞の使用がこれらに偏向していることがわかる。

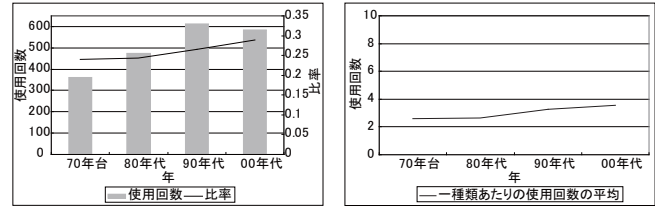


“質” カテゴリー (図7) 使用回数および比率 (図8) 一種類あたりの使用回数の平均

### ③. 性能・性状 (図9)、(図10)

量/質カテゴリーに比べ、知覚からその性質を判断するまでに思考する過程が長く、複雑なものを③～⑤の3つのカテゴリーに分類した。＜単純な＞、＜いろいろな＞、＜自由な＞等、事物の性質、能力、状態を表す形容詞を“性能・性状”カテゴリーとし、この条件により使用回数2029、410種類が抽出された。

性能・性状カテゴリーの形容詞は、使用回数は90年代まで、比率・一種類あたりの使用回数は00年代まで増加している。00年代はくさまざまな＞、＜可能な＞、＜多様な＞、＜単純な＞の順に多く使用されており、形容詞の使用がこれらに偏向していることがわかる。

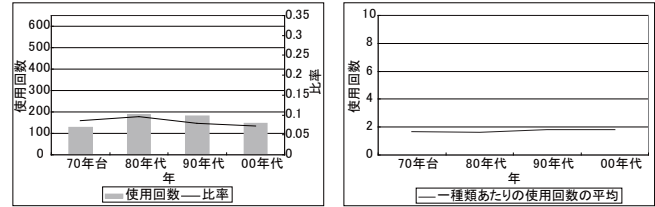


“性能・性状” カテゴリー (図9) 使用回数および比率 (図10) 一種類あたりの使用回数の平均

### ④. 比喩・関連 (図11)、(図12)

名詞に「的な」と付すことで形容動詞の語幹をつくり、「～のような」、「～風な」、「～らしい」といった意味を持つ比喩的な表現となる。また、被修飾語によっては「～に関連する」という意味を持つ。そこでそれらを“比喩・関連”カテゴリーとし、この条件により使用回数642、248種類の形容詞が抽出された。

こうした表現は使用回数、比率共に80年代に最高値となっており、一方、一種類あたりの使用回数は大きな変動が無いことから、80年代は他の年代と比較し比喩・関連を表す形容詞が多様に、また多く使用されていたことがわかる。



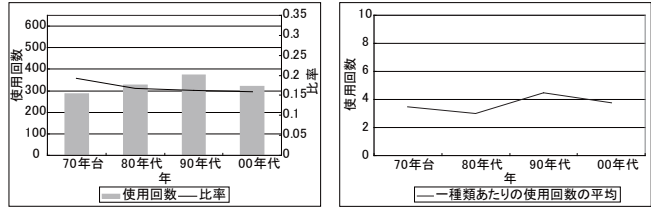
“比喩・関連” カテゴリー (図11) 使用回数および比率 (図12) 一種類あたりの使用回数の平均

### ⑤. 位置づけ (図13)、(図14)

＜新しい＞、＜主な＞、＜特殊な＞等、ある基準、範囲内での事物の位置づけを表す形容詞を“位置づけ”カテゴリーとし、この条件により使用回数1306、188種類の形容詞が抽出された。

70年代から80年代にかけて使用回数は増加しているものの、比率は00年代まで減少している。一方、一種類あたりの使用回数は70・80年代に比べ80・00年代は多いことから、70・80年

代は位置づけを表す形容詞が多様に、また多く使用されていたことがわかる。

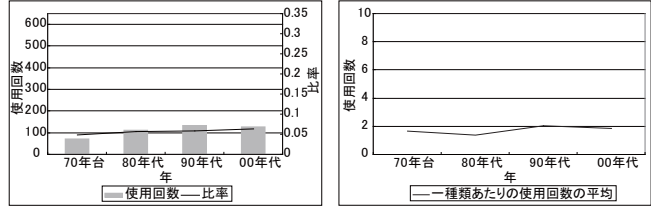


“位置づけ” カテゴリー (図13) 使用回数および比率 (図14) 一種類あたりの使用回数の平均

### ⑥. 印象 (図15)、(図16)

＜不思議な＞、＜静謐な＞、＜繊細な＞等、①～⑤までに挙げた形容詞の意味する、さまざまな性質から派生する印象を表す形容詞を“印象”カテゴリーとし、この条件により使用回数444、159種類の形容詞が抽出された。

70年代から00年代にかけて、比率が微増し続けている。一方、一種類あたりの使用回数は70・80年代と比較すると、90・00年代は多い。90・00年代はそれぞれ＜軽快な＞、＜繊細な＞が最も多く使用されており、形容詞の使用がこれらに偏向していることがわかる。

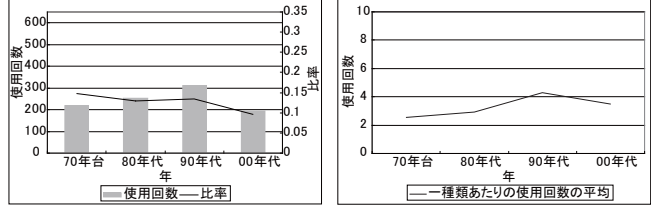


“印象” カテゴリー (図15) 使用回数および比率 (図16) 一種類あたりの使用回数の平均

### ⑦. 評価 (図17)、(図18)

＜すばらしい＞、＜ふさわしい＞、＜悪い＞等、ある理想、希望に対する適/不適や、良い/悪いといった意味の含まれた語を“評価”カテゴリーとし、この条件により、使用回数977、173種類の形容詞が抽出された。

70年代から80年代にかけて比率が減少し、80年代から90年代にかけて微増するものの、再び00年代には減少する。一方、一種類あたりの使用回数は70年代が最低値となっていることから、70年代は他の年代と比較し、評価を表す形容詞が多様に、また多く使用されていることがわかる。

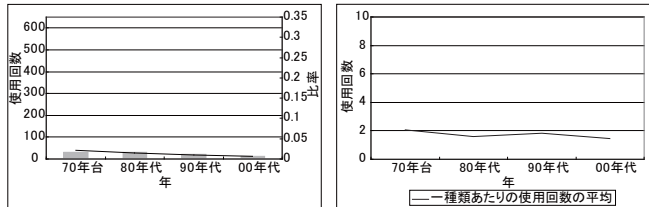


“評価” カテゴリー (図17) 使用回数および比率 (図18) 一種類あたりの使用回数の平均

### ⑧. 感情 (図19)、(図20)

＜楽しい＞、＜退屈な＞等、人の内面的な感情を表す形容詞を“感情”カテゴリーとして分類し、この条件により使用回数96、34種類の形容詞が抽出された。

各年代毎、使用回数、比率、一種類あたりの使用回数全ての項目において、70年代から00年代にかけて減少傾向にあることから、近年に向かって感情を表す形容詞の使用が減少していることがわかる。



“感情” カテゴリー (図19) 使用回数および比率 (図20) 一種類あたりの使用回数の平均

### ■まとめ

各分類の比率を比較すると、量、比喩・関連、位置づけ、評価、感情のカテゴリーは近年に向かって減少傾向にあるのに対し、質、性能・性状、印象は増加傾向にある。建築家がある事物を形容する場合の主題が前者から後者へと移り変わっているといえる。

また、上述した質、性能・性状、印象の3つのカテゴリーは一種類あたりの形容詞使用回数も近年に向かって増加傾向にあり、形容詞の使用が、特定の形容詞へ偏向していることがわかる。

#### 2.2.2. 表記方法

建築史家の五十嵐太郎は序章で挙げた“カワイイ”、“かわいい”に関して、カタカナ、ひらがなのどちらの表記であるかによって語感が異なることを指摘している<sup>10)</sup>。

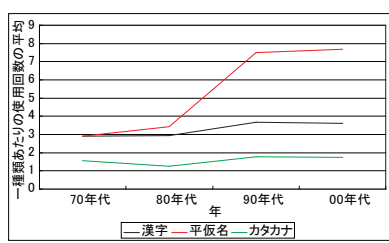
そこで形容詞の表記法によって、漢字・平仮名・カタカナ・英語・数字の5つに分類し、各表記方法毎の使用回数、使用種類数、一種類あたりの使用回数の平均を(表2)に表した。一種類あたりの使用回数は平仮名が最も多いことがわかる。

使用回数の少なかった英語、数字表記を除いた3つの表記方法について、各年代毎の一種類あたりの使用回数の平均を(図21)に表した。

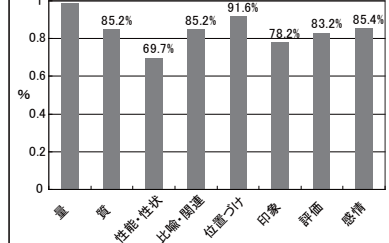
平仮名表記は近年に向かって一種類あたりの使用回数が急増しており、90・00年代ではくさまざまな＞が最多使用回数となっている。

使用回数の少ない英語表記が性能・性状、比喩・関連カテゴリー、数字表記が比喩・関連カテゴリーでの使用がみられた。その他漢字・平仮名

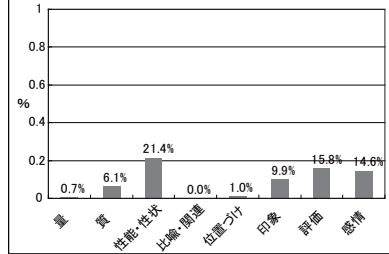
	使用回数	使用種類数	一種類あたりの使用回数の平均
漢字	6522	1097	5.94
平仮名	723	92	7.86
カタカナ	503	217	2.32
英語	7	5	1.4
数字	5	4	1.25



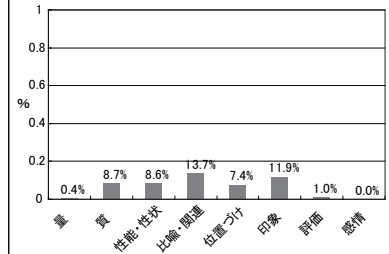
(表2) 形容詞の表記方法分類の概要 (図21) 一種類あたりの使用回数の平均の経年変化



(図22) KJ法的分類別漢字表記の構成比率



(図23) KJ法的分類別平仮名表記の構成比率



(図24) KJ法的分類別カタカナ表記の構成比率

カタカナ各表記の各分類内における比率を(図22)～(図24)に表した。

性能・性状カテゴリーは平仮名表記の比率が最も高く、最多使用回数の形容詞はくさまざまな＞となっている。その他評価、感情、印象カテゴリーではやわらかなイメージをもつ平仮名/ひらがな表記が使用されている(図23)。また、外来語が多く先進的なイメージをもつカタカナ表記は比喩・関連、印象、質、性能・性状、位置づけカテゴリーの順で多い(図24)。

### 3. 結

以上の分析・考察により、建築家の言説における形容詞における全体の傾向として(1)解説文内での形容詞の使用は近年に向かい減少傾向にあるものの、形容詞の使用が特定の形容詞に偏向している。(2)一方、文章内容を端的に表す表題は、使用が増加していると共に、イメージを伝達する性質をもつ形容詞の使用が増加している。という2つの知見を得た。

次に、解説文内で使用された形容詞における個別的分析結果として①80年代において他の年代と比較すると、量、比喩・関連を表す形容詞はそれぞれ他の年代と比較して高い。②00年代に向けて、量、比喩・関連、位置づけ、評価、感情を表すものから、質、性能・性状、印象を表すものへと移行し、後者はそれぞれ特定の形容詞に使用が偏向している。③性能・性状、評価、感情、印象を表す形容詞は柔らかなイメージをもつ平仮名が使用される傾向にあり、比喩・関連、印象、質、性能・性状、位置づけを表す形容詞は、外来語の使用が多く、先進的なイメージをもつカタカナが使用される傾向にある。という3つの傾向を得た。

以上、建築家による表現活動の構造の一端を明らかにした。

【註・参考文献】

1) 真壁智治:カワイイ建築の地平, 新建築, 82巻10号/大学からの新しい風, 新建築82巻12号/建築なるものの変化, 83巻2号, 祖父江慎:ふつういふ世界に生まれる「かわいい」パワ- , 新建築83巻8号/「かわいい」の近くに潜む不気味な幾何学, 83巻10号/「かわいい」のきっかけとドンビシヤな「だいたい」, 83巻, 12号 2) カワイイデザインパラダイム研究, 真壁智治@チームカワイイ, 平凡社, 2009, 9 3) 同2) 4) 真壁智治: 大学からの新しい風, 新建築82巻12号において真壁は「軽いコトバ」とは極私的コトバ、詩的コトバであり感覚共有型のコミュニケーションの上になり立つものであるとしている。 5) オルタナティブ・モダン 建築の自由をひらくもの、藤本壮介, TNプロ- 2005, 3 6) 青木淳、西沢立衛、藤本壮介: 座談会・建築の2010年を語る- 建築の読み替えと空間の名づけをめぐって-, 新建築, 78巻1号 7) 現代形容詞用法辞典, 飛田良文, 浅田秀子, 東京堂出版, 2008, 6 8) 形容詞の意味・用法の記述的研究, 西尾寅弥, 秀英出版, 1972, 3 9) 奥山信一, 坂本一成: 戦後「新建築」誌にみられた建築家の住宅観, 日本建築学会計画系論文報告集, 第428号, 1991, 10/奥山信一, 斉藤千尋, 坂本一成: 戦後「新建築」誌にみられた建築家の都市観, 日本建築学会計画系論文報告集, 第444号, 1993, 2/奥山信一, 持田英明, 坂本一成: 戦後「新建築」誌にみられた建築家の創作の主題, 日本建築学会計画系論文報告集, 第454号, 1993, 12/奥山信一, 山田深, 坂本一成: 戦後「新建築」誌にみられる現代住宅作品の空間モデル, 日本建築学会計画系論文報告集, 第456号, 1994, 2/奥山信一, 坂本一成: 戦後「新建築」誌における建築家の創作論, 日本建築学会計画系論文報告集, 第477号, 1995, 11 10) 成瀬徳行: 建築家の言説における受動態の研究-SD REVIEWに見られる建築家のレトリック(その1), 日本建築学会計画系論文集, 第538号, P. 277, 2000, 12/建築家の言説における自動詞の研究-SD REVIEWに見られる建築家のレトリック(その2), 日本建築学会計画系論文集, 第553号, P. 325, 2002, 3/建築家の言説における補助動詞の研究-SD REVIEWに見られる建築家のレトリック(その3), 日本建築学会計画系論文集, 第577号, P. 217, 2004, 3 11) 9) に挙げた坂本らによる研究において「1970年前後を境として、建築家の創作活動の役割を社会との直截的な関係の中で位置づける高き理想に準拠したものから、巨大化した現実の都市あるいは社会の状況と対応しつつ、建築の実体もたらす概念的な内容に準拠したもの、いわば建築固有の修辭的な体系のうち創作活動としての活路を見出すものへと移り変わってきたと捉えることができる。」という結論に達している。本研究の、建築家の言語表現活動は建築設計に関わる表現活動の一つであるとする位置づけは、坂本らの指摘する1970年以降の特徴である考えられる。本研究では1970年以降の建築家による文章を対象とした。12) 解説文のタイトル、章や節に付された見出しを表題とする。 13) 日本語形容詞の記述的研究-類型論的視点から-, 八尾裕美, 2008, 1 14) 創造性開発のために, 川喜田二郎, 中央公論新社, 1967, 6 15) 本論でいうKJ法的分類とは13) に挙げた川喜田によるKJ法の中で、定性的データとして意味のわかる全体像を作り出す作業をいう。この場合、分類に作業者による恣意性が含まれ、厳密な分類は不可能である。そこで本研究では3名による作業を繰り返し検討・検証し、分類の客観性を高めるように努めた。 16) 同2)